

法界現量について

——初期唯識思想と独我論——

源 重 浩

1. 問題提起

独我論 (solipsism) とは、世界には自分一人しか実在しない、という哲学的立場である。唯識思想を構成する一つの柱として「唯識無境¹⁾」の教学があるが、この側面だけを見れば「唯識思想」は独我論ではないかという疑いが生じる。ミーマンサーからの唯識批判²⁾、中観派のバーヴィヴェーカの唯識批判³⁾の根本には、そのような問題が伏在している。

他思想他学派からのそのような批判に本格的に応えようとした作品として、ダルマキールティの *Samtānāntarasiddhi* が考えられる。他人 (者) の心の実在することが論証できれば、独我論ではないかという嫌疑は解消することになるが、筆者の理解では、ダルマキールティは論証に成功していない⁴⁾。眼に見えない他者の心の実在を主張するためにはアナロジー (類推) に依らざるを得ないが、見えるものの非実在を主張する唯識の立場では、うまくいかない。又、最終的には *vāsanā* (bag chags, 潜在印象, 薫習) で一切を説明するこの立場に立つかぎり、日常経験がうまく説明できないことになる。

このようなダルマキールティの唯識の立場は「唯心論⁵⁾」ということになるが、独我論の問題は、「唯心論」が本質的に云って正当性をもちうるのかという問題と同じであり、「独我論」という問題設定に違和感を覚える人は、「唯心論の本質についての考察」という観点から考えてもらっても構わない。

さて、「初期唯識思想と独我論」研究を進めるにあたり、研究の方法論を整理しておく。研究方法は基本的に二つである。第一には、「文献主義」ということであり、第二には、「哲学的」ということである。第一の「文献主義」とは、議論の根拠として、丁寧に文献を踏まえて、ということである。このことは、インド哲学史の研究として当然のことであるばかりでなく、後述するように、本研究では、西洋哲学の議論にも言及することになるが、その分野においても、文献は

可能なかぎり着実に踏まえなければならない。文献的根拠が薄弱であれば、その上に積み上げられる議論は、砂上の楼閣になるであろう。

第二の「哲学的」ということには二つの意味がある。一つには、必要に応じて西洋哲学の議論に言及するということである。独我論の語あるいは議論は、西洋哲学史において存在したものであり、バークリ哲学とそれにまつわる議論の歴史、並びにカント哲学などに適切に言及することは、議論を深めたり理解しやすくするために効果的であると考えられる。勿論、西洋哲学と仏教の思惟基盤の違いには充分配慮しなければならない。「哲学的」ということのもう一つの意味は、日常経験を踏まえてよく思索をすることである。もとよりインド哲学史において思索をすることは当然のことであるから、そのことの確認をすること（自戒をこめて）と、「日常経験」を重視するということは、研究者の議論の「确实性（正当性）」を支える基盤は、「日常経験」であると考えられるからである。

2. 『大乘莊嚴經論（大乘經莊嚴）』 「眞実品」における「法界現量」について

世親⁶⁾は注釈部分において次のように述べている。

第二偈⁷⁾によって諸の対象は唯意言のみと知って、その対象に似現する唯心の中に住することを（示す）。これが菩薩の順通達分位である。それより後は、法界が現量となるとき、所取能取の相である二相を離れる。これが見道位である。

dvitiyena manojalpamātrān arthān viditvā tadābhāse cittamātre 'vasthānam iyaṃ bodhisatvasya nirvedhabhāgiyāvasthā / tataḥ pareṇa dharmadhātoḥ pratyakṣato gamane dvayalakṣaṇena viyukto grāhyagrāhakalakṣaṇena iyaṃ darśanamārgāvasthā (p.24)

第三偈⁸⁾によつては、如何に、この法界が現量たることに至るか、それを示す。この法界は如何にして現量たるに至るか。心より他に所縁である所取は存在しないと智慧によって理解して、かの唯心もまた存在しないことを理解する。所取が無であるので能取も無であるから。そしてこの二つ（所取能取）が存在しないことを知って法界に住する。それに至ることがないとは、所取能取の二相を離れていること。このようにして法界は現量たるに至るのである。

trītyena yathāsau dharmadhātuḥ pratyakṣatām eti tad darśayati / katham cāsau dharmadhātuḥ pratyakṣatām eti / cittād anyad ālambanam grāhyam nāstity avagamya buddhyā cittamātrasya nāstivāgamanam grāhyābhāve grāhakābhāvāt / dvayasya cāsya nāstitvaṃ viditvā dharmadhātau avasthānam atadgatir grāhyagrāhakalakṣaṇābhyām rahita evaṃ dharmadhātuḥ pratyakṣatām eti (p.24)

ここでは、瑜伽行者が順通達分位に入り、初地の見道において、所取能取の二相を離れるとき、「法界が現量となる（とき）」(dharmadhātoḥ pratyakṣato gamane)、あ

るいは「法界が現量となる」(dharmadhātuḥ pratyakṣatām eti) と語られている。この場合「現量」の原語は pratyakṣa である⁹⁾。

3. 「法界が現量となる」ということの意味

以上の一連の叙述の中で出てくる「法界が現量となる」ということの意味は何なのか。それは先ず第一に、順通達分に入った初地の見道において成立してくる事態であり、所取能取の二相を離れている訳だから、我々が迷いの意識で生み出している対象は消滅していることになる。「現量 (pratyakṣa)」とは何か。akṣa とは眼あるいは感覚器官のことであり、prati は「に対して」「の前に」の意味だから、pratyakṣa は当面の文脈においては、「眼 (あるいは感覚器官) に対するもの¹⁰⁾」を意味すると受けとめるのが、自然であろう。そうすると、所取能取の二相を離れた状態で、従って迷いの意識で生み出している対象が消滅した段階で、「眼 (あるいは感覚器官)」が働いていることになり、迷いの意識で見ている世界 (対象) とは違った世界 (法界) が「眼 (あるいは感覚器官, 五官)」に把握されていることになり、この場合それ (法界) は「実在」としか云いようのないものである。

シュミットハウゼンは『大乘莊嚴經論』のおそらくこの当面の場所と思われる箇所「法界」について次のように述べている。

次に古い瑜伽行派のテキストである『大乘莊嚴經論 (Mahāyānasūtrālaṅkāra)』において、対象は心に他ならない (cittamātra!) という悟りには、心もまた〔究極的には〕存在しない (cittasya nāstitvam upeti) という悟りが後続する。そしてその時はじめて、実在 (dharmadhātu 法界) がおのずから顕現するのである¹¹⁾。

このようにシュミットハウゼンは『大乘莊嚴經論』において、「対象は心に他ならない」という悟りには、「心もまた〔究極的には〕存在しない」という悟りが後続するが、そのとき「実在 (true reality)¹²⁾」としての「法界」が顕現する、と述べられていると云う。

4. 結論

『大乘莊嚴經論』において、偈頌と注釈の両方において「法界現量」が語られる。この場合 pratyakṣa が語られているということは、「眼 (あるいは感覚器官)」が働いていることになり、それによって把握されているものは「実在」としか云いようのないものである。

無著世親の初期唯識思想をどう理解 (解釈, 注釈) するか、ということに関し

ては、基本的には二つの立場がある。護法玄奘の立場と安慧真諦の立場である。瑜伽行者が初地の見道に到達し、所取能取の二相を離れ、迷いの意識で生み出している対象が消滅したとき、護法玄奘の立場では、何も見られておらず、その場合「何か本体的なもの（実在）」が語られることはない¹³⁾。護法玄奘の立場では、「唯識無境」は文字どおり「自己の心の他に実在するものはない」ことになる。また、「他者の心の実在」の論証もダルマキールティの *Samtānāntarasiddhi* がうまくいかないのと同様に成立しない。「他者の心の実在」の論証が何故成立しないか、それはこの立場が「（普通見ている物的なものとは違う）何か言葉では表現できないあるもの（何か本体的なもの）」を語らないからである。

本稿では、「法界現量」の問題をとりあげ、『大乘莊嚴經論』において偈頌と注釈の両方において、「何かあるもの（実在）」が語られていることを指摘したが、それは安慧真諦の立場である。護法玄奘の立場は、「独我論」を主張するものではないが、「独我論でないこと」の論証ができない。護法玄奘の立場は、一つの「唯心論」であり、この立場では「日常経験」がうまく説明できない。「唯心論」の問題点がそこにあると云えるであろう。

- 1) 他に「一切唯識」（『成唯識論』新導本 p.314, 『唯識三十頌安慧釈 (*Trisīkāvijñaptibhāṣya*)』 ed. Sylvain Lévi, 1925, p.35) 等の表現がある。
- 2) 片岡啓「Jayanta の唯識批判—*Nyāyamañjarī* 「認識一元論批判」和訳—」（『哲学年報』第 65 輯別冊, 2006） pp.39–40. 尚「Jayanta の唯識批判」については、別に論ずる予定。
- 3) 拙論「初期唯識思想と独我論—夢の喩例について—」（『南アジア古典学』第 5 号, 2010）参照。
- 4) 『南アジア古典学』第 6 号に発表予定。
- 5) 桂紹隆博士の *Samtānāntarasiddhi* の和訳では *sems tham* は「唯心論」と訳されている。「ダルマキールティ『他相続の存在論証』—和訳とシノプシス—」（『広島大学文学部紀要』第 43 巻, 1983） p.104 参照。
- 6) 著者については、諸説あり。伝説では弥勒を受けた無著の纂。宇井伯壽は偈頌は弥勒注釈は世親（『大乘莊嚴經論研究』岩波書店, 1961, p.1）最近の学界の傾向としては偈頌は無著、注釈は世親とするので、この立場に立つ。
- 7) 偈頌の順序と注釈の順序は一致しない。ここで第二偈と云われている内容は第七偈と一致する。（第七偈）「又、彼は、諸対象を唯意中のつぶやきであるとして、それら諸対象に似現する唯心の中に住する。そして法界が現量となる。それ以後は（彼は）二相から離れる。 *arthān sa vijñāya ca jalpamātrān samtiṣṭhate tannibhacittamātre pratyakṣatām eti dharmadhātus tasmād viyukto dvayalakṣaṇena*」（*Mahāyānasūtrālamkāra*, ed. Sylvain Lévi, 1907, p.24）
- 8) 第三偈と云われている内容は第八偈と一致する。（第八偈）「心より他なるものは存

(104)

法界現量について (源)

在しないという意識をもって到達して、心の存在しない状態となる。故に、智者は二つのものが存在しないということを知ってから、それ(二相)の存在しない法界において住する。nāstīti cittāt param etya buddhyā cittasya nāstītvam upaiti tasmād dvayasya nāstītvam upetya dhīmān samtiṣṭhate 'tadgatidharmadhātau」(p.24)

- 9) 「現量」と和訳した部分は漢訳では、偈頌の部分を含めて次のように訳されている。「偈曰、已知義類性、善住唯心光、現見法界故、解脫於二相。釈曰、此偈頌第二通達分位。由解一切諸義、唯是意言為性、則了一切諸義悉是心光。菩薩爾時名善住唯識。從彼後現見法界、了達所有二相、即解脫能執所執。偈曰、心外無有物、物無心亦無、以解二無故、善住真法界。釈曰、此偈頌第三見道位。如彼現見法界故、解心外無有所取物。所取物無故、亦無能取心。由離所取能取二相故、応知、善住法界自性。」(『大乘莊嚴經論』波羅頗迦羅蜜多羅訳、『大正大藏經』第31卷瑜伽部下 p.599a) また、この部分についての安慧の Vṛtibhāṣya と Tīkā には、ともに世親の注釈よりさらに踏み込んだ叙述は見られない。(早島理, “TATVA — The VI th Chapter of the *Mahāyānasūtrālamkāra* —”, 長崎大学教育学部『社会科学論叢』第32号, 1983, pp.66–68.)
- 10) この場合モニエルの *pratyakṣa* の叙述の中で該当する箇所は, *present before eyes, perceptible, apprehension by the senses*, など。(Sanskrit-English Dictionary, by Monier Williams, 1899, p.674) 『漢訳対照 梵和大辞典』(鈴木学術財団, 1978, p.846) の漢訳では、現量、現見、現前などが見られる。
- 11) Lambert Schmithausen, 龍谷大学仏教学特別講座開設記念特別講演「初期瑜伽行派における修行道の諸相」, 2005, 講演録和訳末尾。尚「実在」の語の英語は講演録和訳では「真実」である。以下は該当箇所英文。In the next ancient text, the *Mahāyānasūtrālamkāra*, e.g., the realization that the object is nothing but mind (*cittamātra!*) is followed by the realization that mind, too, does not [ultimately] exist (*cittasya nāstītvam upeti*), and only then true reality (*dharmadhātu*) manifests itself.
- 12) シュミットハウゼンは *true reality* を大文字で *True Reality* と表記することもある。例えば *Mahāyānasūtrālamkāra* における *tathatā* について言及し, *tathatā* を *True Reality* と英訳している。 *ĀLAYAVIJÑĀNA*, *Studia Philologica Buddhica*, Monograph Series IVa, 1987, p.200.
- 13) 拙論「初期唯識思想と独我論—安慧と『成唯識論』—」(『印度学仏教学研究』第58巻第1号, 2009) 参照。

〈キーワード〉 無著, 世親, 独我論, 唯心論, 護法玄奘, ダルマキールティ
(熊本県立大学非常勤講師)